

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 52
2014年 5月



聖ヨゼフ学院で生徒と交流！ 日本から来たお兄ちゃん、おねえちゃんに興味しんしん！（エルサレム）

5月下旬、教皇フランシスコが、平和の使徒として、聖地イスラエル・パレスチナを訪問します。5月中旬にはイスラエルのネタニヤフが来日しました。日本との経済・技術協力関係を強化するためとか。占領政策や入植地建設などが相変わらず続けられ、紛争の解決の糸口がつかめていません。そんな中で中東和平を考える人々があちこちで集会を開き、来日に抗議する声を上げました。それも当然でしょう。占領下の人々の苦しみを考えれば。

この二つの訪問を比較しながら、私たちの活動は何なのかと自問しました。聖地の子どもたちの教育支援をする？ イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちがいっしょに被災地で汗を流して、「平和の架け橋」を築く？ 中立の立場をとり、双方に耳を傾ける？

紛争解決のために政治的な活動をしている人々にとっては、理解しがたく、歯がゆいと思われるかもしれません。でも私たちは、遠回りではあってもこの小さな道を選びます。皆様の変わらぬご支援を心から感謝いたします。

理事長 井上 弘子



NPO法人 **聖地のこどもを支える会**

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX **03-6908-6571**

E-mail : seichi@k.email.ne.jp hiroko@michi-no-kai.com

ホームページ : <http://seichi-no-kodomo.org>

郵便振替 : 00180-4-88173 加入者名 : NPO法人 聖地のこどもを支える会



Accountability
Self-Check 2008

当NPOは、国際協力NGOセンター（JANIC）によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について適正に運営されていると認定されました。

あなたの一灯が 教育の長い道を照らす

パレスチナの学齢児童数は全人口の約1/3にもなります。当地の政治的混迷の出口は全く見えず、子どもたちは日々紛争の現実を目の当たりにしており、彼らの未来は不確かなままです。学びたい、お金さえあれば学校へいけるのに、熱望しているけれども悲しいかな、経済・社会状況の悪化のためそれはいっそう難しくなっています。

今も続く教育の危機にあって、皆さまの定期的なご支援が貴重な力です。あなたのご支援が子どもたちの生活と未来を大きく変えることができます。

イスラエル、パレスチナの子どもたちに、宗教・性の区別なく良質の教育を提供し続けられるよう、お助けください。暗闇のなかの一灯が新たな未来を照らします。

聖地におけるカトリック学校・学院のための
連帯事務局
アシスタント・ディレクター

アブダラ・アタラー



聖ヨゼフ学院にて（数十人の子どもたちが日本からの支援を受けています）（エルサレム）

スタディーツアー〈平和を願う対話の旅〉2014

参加者の感想

3月6日、「平和を願う対話の旅2014」の参加者が成田空港に集まった。午後10時、参加者全員が、期待に胸を膨らませながら飛行機に乗り込む。12日間のツアーの始まりだ。

ツアーでは、最初の4日間を三大宗教の聖地エルサレムで、次の3日間をキリストの生まれた地であるベツレヘムで、最後の3日間はイスラエルの首都テル・アビブで過ごした。見る景色、聞く話、食べる物など全てが新鮮で、参加者はからだ全体でイスラエルとパレスチナを楽しみ、そして学んだ。実際に自分の五感を使って得たことは今後も私たちの心に深く残るだろう。夜はそれぞれの地でホストファミリーと時間をともにした。日本からは地理的に遠いイスラエルとパレスチナだが、私たちを迎えてくれたホスト



スタディー・ツアー最終日、テルアビブのビーチで。充実感で笑顔がはじけます。

ファミリーは皆あたたかく、本当の家族のように接してくれた。素晴らしい人々との出会いで生まれた絆によって、ツアーはさらに充実したものになった。12日間というツアー日程は、長いようであつという間であった。もちろんこのような短期間では、それぞ

れ豊かな歴史を持ち、現在は複雑な紛争の実情が絡み合うイスラエルとパレスチナを理解することは難しい。しかし、このツアーはいわば「出発点」であり、私たちがイスラエル／パレスチナにこれからもしっかりと関わり続けるきっかけを与えてくれた。私たち参加者は、将来それぞれの生活を送りながらも、このツアーでの経験と実りを共有しながら繋がりを持ち続けるだろう。

(スタディーツアー2014 リーダー 篠原 双葉)

参加者の感想

◎平和のためにできること

伊東 和貴

イスラエル／パレスチナという言葉で連想すること。1つは、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地であるエルサレムを有する国だということ。そしてもう1つは、長い歴史の中で、この聖地を巡る戦いが繰り返され、今なお政治的に対立し、紛争を繰り返している地域であるということ。大学で模擬国連に所属し、パレスチナ問題を議論した経験があり、私は生きていた間に一度はこの地を訪れてみたい、とずっと思っていました。友人が過去にこのスタディーツアーに参加したこともあり、縁あってこのツアーについて知ることができました。

最初の4日間はエルサレムへ。3つの宗教の聖地であるエルサレム・旧市街のもつ荘厳さに圧倒され、感動しました。ただ、歩を進めるにつれて、現イスラエル政府がアラブ人に対して行っている政策を目の当たりにし、外からは見えにくいイスラエル／パレスチナの対立を目にしていけます。エルサレムのホームステイ先では、美味しい食事を振る舞って頂き、素敵な「おもてなし」を受けました。ただ、イスラエル／パレスチナの話となると、少し表情が変わり、これまで受けてきた差別的待遇に対する怒りと、それに慣れてしまった一種の諦めのような感情に接しました。「平和」とは何か、事前研修で学んできたのに、現実を前にして何も言葉がでてきませんでした。

エルサレムからチェック・ポイントを越えて、ヨルダン川西岸地域・ベツレヘムに入ると、パレスチ

ナ問題の和平への道のりの難しさを感じずにはいられませんでした。アイダ難民キャンプでの悲劇、分離壁に囲まれ立ち退きを迫られているホームステイ先の家族、ユダヤ人の入植地に立ち入ることができないヘブロンに住むパレスチナ人。「国際人道法違反」という議論を大学では学んできましたが、そんなのはここにおいては何の意味も持たないことに愕然としました。

そんな気持ちでベツレヘムからテル・アビブに戻ると、地中海沿岸に位置する発展した商業都市にいることに気づきます。ユダヤのお祭りで華やぐ町並みを見ながら、一方で心が躍りながらも、もう一方でここは本当に同じ国・地域なのかと、驚かすにはいられませんでした。ホームステイ先では実業家であるホストファザーの話を聞き、ユダヤ人の商才を直接感じ取ることができました。

3つの都市を行き来する中、分離壁や入植地など、イスラエル政府がパレスチナ側に対して施してきた政策をいやおうなく見てきました。その中で、今現在生きることに苦しんでいる人々も見てきました。

では、この地域での「平和」は絵空事で、実現するのは本当に不可能なのかと言われれば、それもまた違うと思います。数多くの人々が、少しでも生活が良くなるよう、努力している姿を、同じくこのツアーで見知ることができました。介護施設、聴覚障害児の教育施設、親と離れて暮らさなければならぬ子どもを預かる施設。人々の心の拠り所として支援をする修道会。イスラエルとパレスチナの子どもたちを共に教育するという試み。更には、ユダヤ人でありながらも、チェック・ポイントの行き過ぎを監視し、パレスチナ子どもたちを海に招こうとする活動家など、さまざまな次元から「平和」を創っていこうという想いが伝わってきました。

旅立つ前、イスラエルとパレスチナという括りのみならず、昨今の東アジア情勢を含めた、自分たちのこととしても「平和」を考えていきたいと述べました。1つ1つの小さな交流が「平和」に繋がることをツアーで実感し、帰国した今、実践していこうと強く思っています。

もう1つは、雑多な情報に煽られず、正しい情報

にアクセスし、多様な見方を持ち続けようということです。これには1つ面白いエピソードがあります。死海でのエクスカージョンの際、旅行中に発生したガザ地区との紛争について議論した時のことです。イスラエルの学生は、ヨルダン川西岸のパレスチナ人もガザ地区を応援しているに違いないと言いました。でも、私がホームステイ先で聞いたこととはまるで違ったのです。ステイ先のマザーは、もはやガザのことは分からないし、知り合いもないと言ったのです。さらに驚いたことは、このイスラエル人学生はガザ地区の場所を知らなかったのです。

安易に不正確な情報に惑わされず、対話の道を開いておくことがどれほど重要か、このやりとりをもって痛感しました。今後も、日本のこと、そして少し遠いイスラエル／パレスチナのことについて、アンテナを張りながら、「平和」のためにできることを少しずつ実践していきたいと考えます。

◎ツアーで学んだこと

藤居 由依

私がツアー参加を決めた理由は、新社会人として世に出る前に、平和に関する問題が起こっている現場を訪れたいと思ったからだ。私の将来の夢は平和構築に携わる仕事に就くことである。今春から一般企業で働くのだが、日々の業務に追われて、夢を忘れてしまわぬよう、何らかの形で現場につながりを得たいという思いから応募を決意した。そこで私がこのツアーに参加するにあたって立てた目標が以下の三つである。一つ目が、現地で感じることを胸に焼き付け夢を叶える原動力とすること。二つ目が現地で求められていることが何であるか把握すること。そして最後の目標が自分の三年後のビジョンを見定めることである。どの項目も抽象的な形でしか果たすことが出来なかったが、出国する時には予想もしなかった学びがあったので、それも含めてお伝えしたい。

まず、私の学びは三点ある。第一の学びは「現地に赴くことの重要性」である。百聞は一見に如かずというが、この旅ほどこの諺の意味を痛感したものは無い。現地でお世話になったパレスチナ／イスラ

エルの友達から、不自由な日常生活の一端を聞き、また実際に難民キャンプや西岸地区の入植地を訪れることで、ありのままのイスラエル／パレスチナ問題を目の当たりにした。メディアを通していないありのままの情報は、私たちに深く考える余地と心に刻み込まれる感情を与えてくれた。また、現地にてこれからも大切にしたいと思える友人を得たことで、問題が「遠いどこかで起こっている大変なこと」という感覚から、真に自分に迫った問題と捉えられるようになった。この経験は間違いなく夢へと突き進める原動力となるであろう。

第二の学びは、「考えを聞きあうことの重要性」である。日本人のメンバーと現地で見ただけで考えたことについて考えを共有し合うことで新たな気づきを得、また自分の考えを深く掘り下げることができた。日本人同士だけでなくパレスチナ、イスラエル人の方との考えの共有も私の視野を広げてくれた。特に印象に残っているのがイスラエルでお世話になったホームステイ先のお父さんのおっしゃった言葉である。「イスラエル人のほとんどが何とかパレスチナ側と平和な関係を築きたいと考えている。しかし、極右の人たちがそれを許さず、彼らの持っている力は計り知れない。」この言葉に私は「一連のイスラエル政府による行為＝イスラエル人が持つ感情」と一般化していることに気付いた。そしてパレスチナ人はこの言葉を聞くとどのように感じるのだろうかと思った。壁の向こう西岸地区に住むパレスチナ人の方も「パレスチナ人のほとんどはイスラエルと平和を築きたいと考えている。」とおっしゃっていた。お互いが持つ思いには共通するものが存在している。そしてこの事実は間違いなく平和への糸口となるであろう。にもかかわらず、またしても壁が、考えを聞き共有することを遮断している。第三者である私にできる一つの行動はイスラエル／パレスチナに「想いの橋」を架けることではないかと思う。そしてこれが私なりに考えた「現在、現地で求められていること」である。

最後の学びは「将来のビジョン」である。今回のツアーではたくさんの平和に関する活動を行うNGO 法人の方のお話を伺った。今までは平和構築

となるとどうしても国際連合や大きな枠組みで働く組織を想像しがちだったのだが、草の根レベルで小さいけれども着実に変化をもたらしている NGO 団体の存在に感銘を受けた。このような団体の存在を知るにあたって、将来自分がどの場に属して活動していくか選択に広がりが出た。現場で役立つ人材になれるまで、みっちり社会人として勉強を重ねようと士気が高まっている。このような心境で新社会人生活を迎えることができたのもひとえにこのツアーのおかげである。

以上がツアーを通して学んだことであるが、このツアーのコーディネートをしてくださった聖地の子どもを支える会の運営委員の方、代表の井上さん、現地で起こる全てのことに適切な対処をしてくださったステラとヤクブ、そして温かく迎え入れてくれたホストファミリー、素晴らしいメンバー、全ての人々に支えられることでこのような素晴らしい体験をすることが出来た。非常に感謝し、また恩返しをしていきたいと心から思う。本当にありがとうございました。

元囚人、高校生にヘブライ語と心の豊かさを教える

y net news.com 2014年4月7日付記事より

パレスチナの高校で、ヘブライ語を教えている一人の男性の姿があった。彼の名前は、エスマット・マンスール、パレスチナ人だ。彼は生徒たちに「ヘブライ語を学習するには賛成か、それとも反対か?」と問いかける。その質問に賛成と答えた生徒は少数で、その他大勢の生徒は反対と答えた。確かに、敵対国イスラエルの言葉を学ぶのは、心情的には抵抗があるのが当然だろう。

しかしマンスールは、このような話し合いをすることにより、学生たちがヘブライ語を学ぶきっかけができると考えている。イスラエル人と話し合うために、また将来の平和の架け橋を築くために、学生たちがヘブライ語を学習するべきだと、マンスールは言う。

実は、1993年にマンスール(当時16歳)は、イスラエル人のハイム・ミズラヒ(当時30歳)殺害の共犯者として、22年の禁固刑を受けて服役した。しかし、最近のパレスチナとイスラエルの和平交渉により、最初に釈放されたパレスチナ人受刑者の一人だ。

釈放されたマンスールは、新たな人生を「平和」に捧げることに決めた。

「もう誰の命も奪いたくはない。」と彼は言う。そしてこう続ける。

「最も大切なことは、全ての人の命を尊重し、平和

について考えることだ。」

だが、加害者であるマンスールに人生があるように、殺されたハイムの家族側にも人生がある。

被害者であるハイムの弟のイジク(32歳)は語る。「釈放された囚人は、再び人生をやり直すことができる。しかし、私たち家族は、2度とハイムに会うことはできません。被害者の家族は、悲しみ続けるのです。」

事件当時、ハイムの妻は妊娠していた。生まれた娘のテヒラは父親を知らず、今年で20歳になった。

今、マンスールはイスラエルとは敵対関係にあるパレスチナ解放機構の党派に所属しているが、イスラエルとの和平を望んでいる。彼を変えたのは、刑務所での生活だった。そこではヘブライ語を学び、毎日ヘブライ語の本を読んでいた。おかげで、以前はパレスチナ側の視点でしか物事を考えられなかったが、今は、イスラエルのことも含め、もっと大きな観点で物事を見られるようになったという。

「私は、酷くてつらい経験をしました。しかし、この経験を通して物事をより深く考えることができるようになりました。人のため、平和のために生きることこそが重要なのです。」と、最後にマンスールは話した。

最近、久しぶりにイスラエルとパレスチナ自治政府の間の和平交渉が話題にされました。去年7月、3年ぶりに交渉が再開されたのですが、その期限とされた今年4月末に「決裂の危機」といわれ、結局成果のないまま、期限切れを迎えました。仲介に動いた米国政府は落胆を隠せないでしょうが、「和平の危機」はこれまで何度も繰り返されてきました。逆に言えば、和平の機運はいずれまた高まる時がくると思えばいいのでしょうか。

そもそも中東和平交渉とは何か。始まりは、1993年8月にオスロ合意として発表されたパレスチナ暫定自治協定で、筆者が初めてエルサレムに特派員として赴任した年です。合意の基本概念は「平和と土地の交換」、つまりイスラエル側は67年の第3次中東戦争で占領したヨルダン川西岸、ガザの土地を自治領として与える(返す)から、パレスチナ側はテロ攻撃などでイスラエルの安全を脅かさないように、というものでした。

交渉により自治領域は広げられていきました。しかし、それは段階的で、パレスチナ人が自由に行き来できる土地は少しずつしか広がらず、和平交渉に対する不信感が過激派を勢いづけたと言えます。そうして94年から自爆テロによるバス爆破が起こりはじめました。イスラム過激派など、イスラエルとの妥協を認めず和平交渉に反対する勢力が、交渉の妨害を狙ってテロに走ったのです。一方イスラエル側にも、パレスチナ人との共存を否定し、和平交渉に反対する勢力があります。テロは、そのような人々に「それ見ろ。和平は安全をもたらさない」と交渉反対の口実となりました。

当時イスラエルの首相だったラビン氏は、テロを理由に交渉を中断するとは言いませんでした。不都合が起きればすぐ交渉をやめるのでは、和平に反対して事を起こそうとするイスラエル、パレスチナ双方の強硬派の思うつぼだという判断があったと思われる。交渉継続が必要との信念を持っていたラビン首相が、イスラエル国内の極端な和平反対派の同胞に暗殺された(95年11月)のは、中東和平にとって大きな痛手でした。

そのころ野党のリーダーとして激しくラビン首相

を批判していたネタニヤフ氏が現在の首相です。イスラエル政府は、去年7月に再開された交渉の期限がこの4月いっぱいまで切れるのを前に、交渉中断を宣言しました。パレスチナ自治政府が和平交渉期間中に国際機関への加盟申請をしたのは合意に反するという理由に加え、自治政府の主流派組織ファタハとガザ地区を実効支配しているイスラム組織ハマスが4月23日、統一政府づくりに合意したのが理由です。イスラエル承認に反対するハマスを、イスラエル政府は交渉相手としておらず、両組織の和解は、政権内に和平反対の極右政党を抱え、自身も和平に消極的なネタニヤフ首相にとっては、交渉を中断する格好の口実となったわけです。

交渉というものは、妥協なしに成功することはまずありません。パレスチナ自治政府に、民衆に妥協を受け入れさせる力も、民衆からの信頼もないのは確かです。そんなパレスチナ側に譲歩を示し、妥協を促せるのは、武力でも経済力でも圧倒的に強いイスラエル側です。しかし、パレスチナ側が被占領状態を脱け出せないでいる状況の中で被害者意識を強めるのに対し、強いはずのイスラエル側もユダヤ人の受難の歴史を引き合いに出し、いつでもテロの脅威にさらされるという被害者意識で対抗するのです。

この被害者意識の均衡を崩すには、イスラエル側が強者であることを自覚して、歩み寄りの糸口を提供することではないか、と考えるのです。例えば、ヨルダン川西岸のあちこちに築かれ、パレスチナ人の生産活動や生活を分断している入植地活動をやめること。目に見える譲歩があれば、頑なな反イスラエル感情を少しは和らげるのではないかと思います。

(元朝日新聞エルサレム特派員、中東支局長)

顔の見える支援 里親募集中!

ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。

里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば(任意)、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

詳しくは、
当法人事務局まで。tel. 03-6908-6571

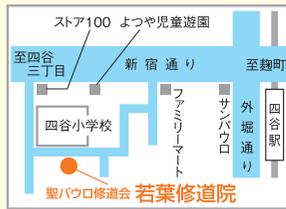
イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ

——音楽とビュッフェのつどい

後援 駐日イスラエル大使館、駐日パレスチナ常駐総代表部

7/19 (土) **17:00** (開場16:40)
チケット **¥5,000** **80名限定**

聖パウロ修道会
若葉修道院 地下ホール



- 東京外丸の内線、南北線、JR中央線『四谷』より徒歩約7分
- 東京外丸の内線『四谷三丁目』より徒歩約7分

家田紀子 ソプラノコンサート



ピアノ
瀧田 亮子

パレスチナ料理 ビュッフェ タイム
高級パレスチナ料理店『アルミーナ』による立食ディナータイム。

トークタイム

イスラエル、パレスチナ在日外交官の方々より

イスラエル、パレスチナグッズ **お楽しみバザール**

主催 **NPO法人 聖地のこどもを支える会**

人数限定のためお早めにお申込みください。

TEL 03-6908-6571 又は090-6538-3255(井上)
E-Mail hiroko@michi-no-kai.com



プロジェクトへの支援は
インターネット寄附(クラウドファンディング) もご利用いただけます

特典いっぱい!

readyfor 検索 または プロジェクトを探す 検索

寄附のしかた

<https://readyfor.jp/> にアクセスし

画面右上の「プロジェクトを探す」ボタンから、
プロジェクト一覧ページに飛びます。

「プロジェクトを探す」ボタン



画面を下にスクロールして
「イスラエル・パレスチナと日本の
若者が被災地でボランティア」の
項目を探してください。



イスラエル・パレスチナと日本の若
者が被災地でボランティア！

「READYFOR」クラウドファンディング
プロジェクト

イスラエル、パレスチナと日本の若
者が被災地でボランティア。国際
のつながりを通して、紛争と災害、命の尊
厳を守るために、平和の架け橋。心
なることを目指します！

達成率 達成金額 終了まで

33% 900,000円 残り

写真下の
青い文字を
クリックして
寄附ページに
進んでください

プロジェクトの紹介をはじめ、寄附の
金額に応じた特典を掲載しています。

支援金の自動払込みサービス

ご好評をいただいている自動払込みサービス。
まだの方はぜひご利用ください。

- * 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます！

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**

または **042-636-9218** (中山)

2014 スタディーツアーから



▲死海のほとりで楽しい昼食。みんな友だちになりました。



▲死海エクスカッション、海拔ゼロ地点のモニュメントに登って。



▲アイーダキャンプ見学。ガイドは難民の青年。長らく難民生活の辛さを語ってくれた。(ベツレヘム)



▲アイーダ難民キャンプのゲート。巨大な鍵は「ふるさとの家に絶対帰るぞ!」というパレスチナ難民の強い意志の表われ。(ベツレヘム)

復活祭はおめかしタイム・町で出会った子どもたち



▲復活祭「枝の主日」、巨大な棕櫚の枝を持って行進するガールスカウトたち。(ナザレ・受胎告知教会)

▼エルサレム西の壁で出会った、超正統派ユダヤ人の子どもさんの家族。



写真提供 有馬啓介、井上 弘子